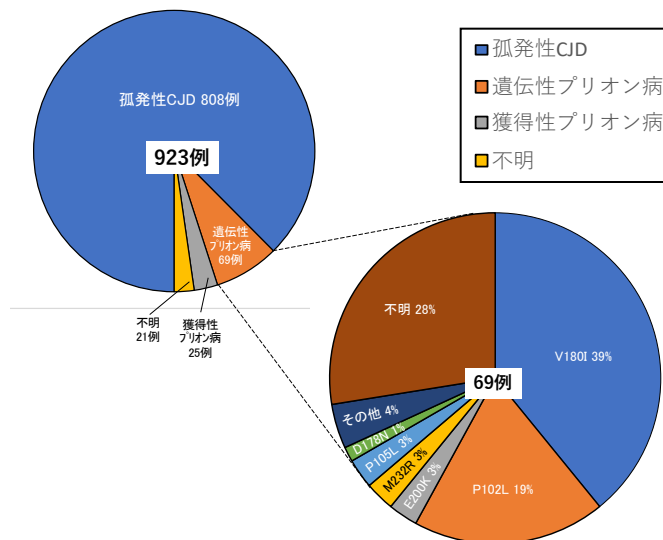


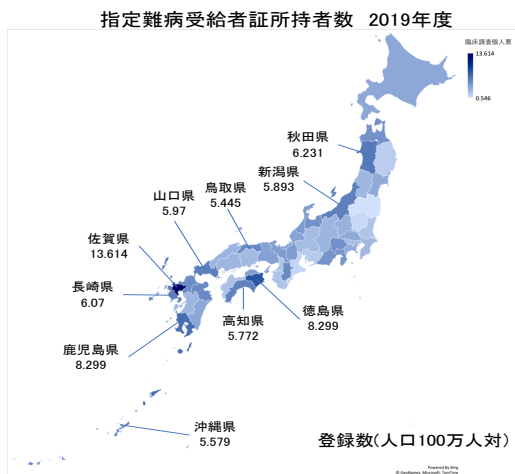
# プリオン病サーベイランスデータの管理・運用の研究

研究分担者: 東海大学医学部 臨床薬理学 金谷泰宏

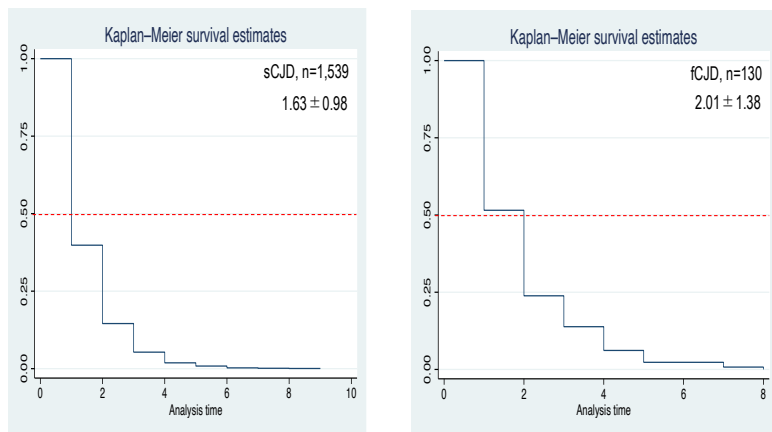
## 1 臨床調査個人票に基づくプリオン病の病型



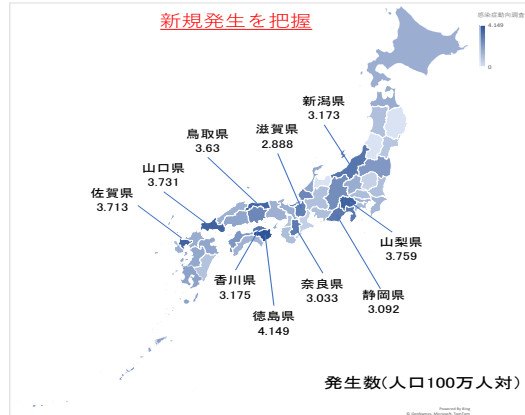
## 3 プリオン病の地域分布



## 3 プリオン病の各病型における予後



## 感染症動向調査 2019年度



## 解説

- 2009～2014年度までに923例が難病として登録され、その内訳として、孤発性808例、遺伝性69例、獲得性25例、不明21例であった。
- 遺伝性は、V180I 39%、P102L 19%、E200K 3%、M232R 3%、P105L 3%、D178N 1%、その他4%、不明 28%であった。
- 孤発性プリオン病と遺伝性プリオン病の予後について比較を行った。孤発性では1.63±0.98年、遺伝性では2.01±1.38年と、遺伝性で進行が遅い傾向にあることが示唆された。
- プリオン病の罹患率については、個人票に基づく調査と感染症発生動向調査での比較を試みた。